90歳ぐらいまでは現役で映画を創りたいです。

狛江市の名誉市民第1号に絵手紙作家の小池邦夫さん（79）とともに選ばれ、今年度の文化功労者にも選出された映画監督でキャメラマンの木村大作さん（81）に話を聞いた。

映画監督・キャメラマン
狛江市名誉市民・文化功労者
この人と　木村（きむら）　大作（だいさく）さん

名誉市民と文化功労者■自分が住んでいる町から選んでもらったことがすごくうれしいです。他の自治体の名誉市民は、出身者を対象にしているところが多いので、最初は驚きました。文化功労者は、映画界ではこれまで監督と俳優しかもらっていません。今回は多くの映画を撮影したキャメラマンとしての仕事と、3本の監督作品が評価されました。裏方の技術分野で初めてなので光栄です。後輩のキャメラマンだけでなく、美術など他の分野に光が当たるきっかけになればうれしいです。

映画キャメラマンに■高校卒業当時は景気が悪くて就職試験は11社すべて落ちたんですが、学校の求人欄に東宝の社員募集があったので受けたら合格しました。入社して世田谷区の砧撮影所に入り、最初に黒澤明監督の「隠し砦の三悪人」の撮影助手になりました。黒澤監督は仕事に厳しい人でしたが、いま振り返ると、その時の経験が、その後の映画人としての運命の分かれ道であり、原点になりました。撮影助手は60人ぐらいで、僕は一番下っ端の使い走りでした。それまで写真のカメラも持ったことがなく、何も分からない世界で使い走りをするのはおもしろくなく、最初は悶々としていました。ただ、自分が希望しないことでも5年は取りあえずやってみようと考えていました。仕事を覚え、助手仲間と技術を磨くうちに28歳ぐらいから仕事がおもしろくなりました。当時の撮影所は年功序列の世界でしたが、33歳の時に異例の抜擢で須川栄三監督の「野獣狩り」のキャメラマンとしてデビューしました。東宝に15年間勤めて退職し、その後はたくさんの監督から声をかけられフリーキャメラマンとして仕事を続けてきました。

監督デビュー■65歳頃からキャメラマンの仕事が減ってきましたが、いつも映画の歴史に残る美しい作品を創りたいと考えていました。ある時、自分で企画、プロデュースをして金を集め、脚本を書いて撮影すれば映画ができると思い、監督になりました。監督として自分で全部やるのは大変ですが、あれこれ言われることなく精神的に開放されるので気持ちは楽です。新しい企画を探すのは大変ですが、年に1本は企画書を書いています。これまで4年に1本のペースで作品を創ってきたので、そろそろ次作を創りたい。できれば時代劇をやりたいです。振り返ると、黒澤監督の下で映画人としてスタートし、初監督作品がヒットし、文化功労者に選ばれるなど、運が良かったです。新藤兼人監督は100歳まで創ったけど、そこまでは無理でも、90歳くらいまでは現役で映画を創りたいです。

狛江について■東宝に勤めていた頃、最初は世田谷区祖師ケ谷大蔵に住み、その後撮影所の近くを転々として狛江にも住みました。多摩川決壊の時も狛江にいましたね。いまは和泉本町のマンションに住んでいるので、合わせて20年くらい狛江に住んでいます。以前は健康のため野川周辺を走っていました。いまは時々市内を散歩するくらいですが、多摩川の桜並木は見事ですね。映画に使うとしたら市内では泉龍寺か古民家園が良さそうです。

木村大作さんの横顔＝現在の千代田区神田錦町生まれ。都立蔵前工業高等学校卒業、昭和33年に東宝へ入社。黒澤明監督の作品5本のスタッフとして働く。48年に須川栄三監督の「野獣狩り」でキャメラマンデビュー。53年の第1回日本アカデミー賞優秀技術賞を受賞した「八甲田山」など数多くの作品のキャメラマンを務める。平成21年に初監督作品「劔岳　点の記」で第33回日本アカデミー最優秀監督賞と最優秀撮影賞、第52回ブルーリボン賞新人賞などを受賞、30年の「散り椿」は第42回モントリオール世界映画祭の審査員特別賞を受賞。15年に紫綬褒章、22年に旭日小綬章を受けた。

とれたて農産物直売所

小町新一さん
友一さん
小町友一さん

小町新一さん(68)・友一さん(43)親子は、年間約40種の鉢植え花と約10種の野菜などを栽培し、温室横で直売するほか、花はJAマインズにも出荷する。

シクラメン約8,000鉢のほか、年末年始にかけてパンジー、ビオラ、葉ボタン、ストックなどの花、朝採りのブロッコリーやハクサイ、ミカン、ユズなどを販売。シクラメンは全国発送もする。45年以上前から手がけている主力のシクラメンは、家族4人でタネから育て、葉の組み替え、水やりなどを手作業で行っており、11月に開花するよう育てている。温室を回って自分で好きな鉢が選べるほか、花の管理についても教えてもらえると好評で、毎年のように訪れるなじみ客も多い。友一さんは「お客さんから『長い間花が楽しめて良かった』などと聞くとうれしいです」と話している。

所在地＝中和泉4-14
販売＝2月・8月を除く通年
時間＝午前9時～午後4時
（夏期は5時）

店舗めぐり ◆94◆

市内の住宅建設や不動産の仲介手がける

兼松建設㈱

兼松建設株式会社（和泉本町1-6-21）は、戸建やアパートなどの住宅建設・リフォームのほか、マンションやアパートの仲介を行う不動産関連会社。

創業者の沼倉松吉社長は（83）は、秋田県雄勝郡皆瀬村（現・湯沢市）の兼業農家の5人兄弟の長男に生まれた。中学校卒業後に上京、多くの会社で働いた。建材会社に勤めた時にダンプカーの取り扱いや整備を覚え、大型車の運転免許を取った。昭和35年にダンプを購入、埼玉県草加市にあった自宅で「沼倉商事」を創業、東日本と北海道を中心に砂利を運ぶ建材業を始めた。当時は東京オリンピックを前に道路や宿泊施設などの建設ラッシュで会社は急成長、郷里の知人を雇って最盛期にはダンプを７台まで増やした。秋田の実家がダムで水没したため、39年に父の兼松さんと当時中学生だった末っ子、石川県能登に就職していた妹のタネさん（76）を呼び寄せ、現在の狛江市西野川にあったアパートへ引っ越した。ところがオリンピックが終わると仕事が急減したため会社をたたんで建材会社に就職した。コンクリートミキサー車の運転手として働きながら、知人の不動産会社を手伝い、不動産取引のノウハウを学んだ。48年頃に市内の貸家へ引っ越すとともに、父の名を付けた「兼松商事」の看板を掲げ、近所の農家が所有するアパートなどの賃貸情報を集め不動産取引業を始めた。

（右から）沼倉健一さん、正松さん、松吉さん、社員の羽生田芳子さん

現・同社専務の正松さん（72）は松吉さんのすぐ下の弟で、郷里の中学校卒業後に集団就職で愛知県のタイル工場に勤めながら夜間高校で学んだ。42年に東京の大学に合格して上京、松吉さんらと同居し、兄の仕事を手伝いながら大学へ通った。卒業後は出版社に勤めたが、48年頃、松吉さんが知人から不動産業務の知識を見込まれ、埼玉県のゴルフ場用地の買収を依頼されたのをきっかけに正松さんも出版社を退社、兄と一緒に不動産業で働いた。

その後、松吉さん、タネさん、正松さんは相次いで結婚、友人の協力で岩戸北に広さ約5㎡の店舗をオープンした。西野川に建売住宅を建設して販売したのをきっかけに、賃貸に加えて不動産売買に業務の幅を広げた。その後は、地元工務店と組んで農家の土地にアパートや建売住宅を次々と建てて販売するなど事業を拡大、53年に法人化して現在の名称となった。55年頃に中和泉の狛江通り沿いに店舗を移転、年商は10億円に達した。その後も従業員が増え和泉本町1丁目の狛江通りに面した店舗へ移転、平成13年に現在の場所に自社ビルを建設した。この頃に市役所周辺の商店や企業を中心とした狛江駅北口商工振興会を結成、現在まで会長を務めている。松吉さんの長男の健一さん（38）は、大学卒業後に不動産開発会社に5年間勤務した後、20年に父の会社に入社し家業を継いだ。

同社が手がけた建売住宅や共同住宅は市内だけで150件を超え、現在はこれまでに手がけた戸建てや共同住宅のメンテナンス、リフォームのほか、賃貸住宅の管理を中心にしている。「地元の農家や工務店など、多くの人に支えられて事業展開できたので、今後も地域を大切にしながら、時代に即した仕事を続けていきたい」と話している。

兼松建設㈱☎3488-3952、営業時間＝午前9時～午後5時、土・日曜、祝日休み

35年に建材業で創業／市内で建売住宅やマンション建設

「コロナに負けるな」音楽でエール

市制施行50周年記念「音楽の街ー狛江」特別コンサート

市制施行50周年記念事業「音楽の街ー狛江」特別コンサートが11月21日㈯にエコルマホールで催された。

「音楽でエールを」を合い言葉に狛江ゆかりの音楽家が出演。松原俊雄市長は「コロナ渦のなかでプロの演奏家の人たちが対策を練り、努力してくれて実現した。質の高い音楽を楽しんでください」と挨拶した。

1部「ヴァイオリン、フルート、ピアノによる円熟のサウンド」はヴァイオリニスト堀江悟さん、フルート奏者堀江伶子さん、ピアニスト渡辺文子さんが「花のワルツ」などを演奏。第2部は「魅了する歌声」としてソプラノ江口二美さん、テノール青柳素晴さん、ピアノ田中梢さんがオペラ「椿姫」より「乾杯の歌」などを熱唱。3部の「珠玉のアルゼンチンタンゴ」では池田みさ子とオルテンシアのピアニスト池田みさ子さん、バンドネオン奏者池田達則さん、早川純さん、ヴァイオリニスト吉田篤さん、専光秀紀さん、コントラバス奏者東谷健司さんが「ラ・クンパルシータ」などを披露。最後に全員で市の歌「水と緑のまち」を演奏した。

出演者全員で市の歌「水と緑のまち」を演奏

コンサートは定員を通常の約半分に絞って郵送で事前募集したが、すぐに定員に達したほどの人気。客席の聴衆は熱のこもった生の演奏にじっくりと聴き入っていた。出演者は「コロナで半年以上コンサートができなかったので、久しぶりの演奏で緊張しました」「たくさんの人に生演奏を楽しんでもらえて良かった」と話していた。

つなげよう音楽の架け橋